＜市町村教育委員会名＞　川口市教育委員会
＜所在地＞　川口市青木２－１－１
＜電　話＞　０４８－２５９－７６６２
＜本事例の特徴＞
　本事例は、遠隔地との授業・交流における ICT の有効活用に関する本市の取組について紹介するものである。

＜具体的な取組や成果＞

　令和３年度の中学校英語教育実施状況調査において、本市の９０％以上の教員は授業で日常的にデジタル教科書を使用していることが分かっている。しかし、ICT 活用の範囲は狭く、タブレット等を活用しきれていない現状がある。本事業は、GIGA 端末が１人１台導入された今、外国語・外国語活動の授業において、ICT をより有効に活用し、児童生徒のコミュニケーション能力育成を目指した取組である。

　そのために、

①県庁国際課の行っている、オーストラリア　クィーンズランド州の小学校とのマッチング交流事業を活用し、交流の相手校を探す。

②テーマを決めた発表、ライブ双方向型授業、教員交流等を計画した。

交流相手校　Wellers Hill State school（ウェラーズヒルステイトスクール）
所在地：オーストラリア　クィーンズランド州タラギンディ　ブリスベン郊外
児童数：８４０人
概　要：オーストラリアのカリキュラムに則り、英語と日本語のバイリンガル教育を推進
　　時差は１時間（ブリスベンのほうが１時間進んでいる。）
　　１９２６年開校
　　校長　Vicki Caldow　　副校長　Luisa Battye

交流授業の様子

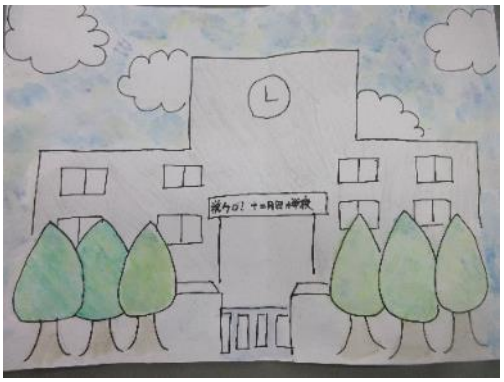
※令和３年度は２回の交流授業＋ペンパル事業を行った。
　令和４年度は１回の交流授業を行った。
相手校の紹介（副校長）
　（１）バイリンガルプログラムの内容について
　　・在籍児童の約半数が本プログラムを受けている。
　　・１年生　ひらがな、２年生　片仮名、３年生から漢字を学習する。
　　・日本語を用いて算数や理科等様々な教科を学習する。
　　・日本の文化を取り入れた行事を定期的に行っている。

（２）相手校児童による日本語のスピーチ

・バイリンガルプログラムに所属する生徒が自分の学校の特徴や良さについて日本語でスピーチした。流暢な日本語に児童からは、驚きの声が上がった。同世代の子供が日本語を熱心に学んでいる姿から多くの児童が刺激を受けた様子であった。

（３）児童による学校紹介

・グループごとに自分の学校の様子や行事、クラブ、委員会活動などについてフリップを作成し、英語で紹介した。



○児童の感想より（一部）

○相手の学校のことも知れたし、私も頑張ろうという気持ちになれました。遠く離れているからこそ、つながったときにうれしいという気持ちになりました。

○オーストラリアの友達が上手に日本語を話していて、すごいなと思った。自分も英語を頑張らなければ、と思いました。日本と共通なものや違っているものなどが知れて、楽しかった。また交流してみたい。

○相手を理解しようと必死に画面を見つめ、英語を一生懸命聞き取ろうとしたり、自分たちの伝えたいことを英語で伝えたりすることができていた。

○オーストラリアや相手校の児童への関心が高まり、もっと英語を話せるようになりたいという意欲の向上につながった。

○オーストラリアのことについて自ら調べたり、それを家族と共有したりするなど、主体的に学びに向かう姿勢がみられるようになった。